

博士論文（要約）

論文題目 堀辰雄研究——翻訳から創作へ

氏名 戸塚 学

(2) 目次

凡例

序論——翻訳から創作へ

第一部 翻訳から小説へ

第一章 詩的モダニズム——翻訳・詩・コント・エッセイ

第二章 「不器用な天使」論——翻訳から小説へ

第二部 モダニズム文学の翻訳

第三章 「聖家族」論——ラディゲの翻訳

第四章 プルーストの翻訳——『美しい村』へ

第三部 古典の翻訳

第五章 「物語の女」論——昼顔はどこに咲いているか

第六章 「かげろふの日記」論——古典の翻訳

第四部 『風立ちぬ』論

第七章 『風立ちぬ』論——小説の時間

第八章 『風立ちぬ』論——「死のかげの谷」におけるリルケ翻訳

補論 堀辰雄旧蔵洋書の調査

第九章 アポリネール関連書物

第十章 ラディゲ関連書物

第十一章 コクトー関連書物

結語

214	174	168	161	160	148	126	125	104	87	86	71	53	52	35	24	23	2	1
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---

(3) 本文

5年以内に出版予定

(4) 参考文献一覧

【堀辰雄テキスト】

- 『堀辰雄全集』全七卷（新潮社、昭29～32）
『堀辰雄全集』全六卷（新潮社、昭33）
『堀辰雄全集』全十卷（角川書店、昭38～41）
『堀辰雄全集』全十一卷（筑摩書房、昭52～55）
『堀辰雄作品集』全五卷（筑摩書房、昭57）

【研究書】

- 丸岡明『堀辰雄——人と作品』（四季社、昭28）
吉村貞治『堀辰雄——魂の遍歴として』（東京ライフ社、昭30）
小久保実『堀辰雄』（現代文学研究会、昭26）
中村真一郎編『日本文学アルバム 堀辰雄』（筑摩書房、昭29）
谷田昌平・佐々木基一『堀辰雄——その生涯と文学』（青木書店、昭30）
中村真一郎編『近代文学鑑賞講座』第十四卷（角川書店、昭33）
大森郁之助『演習 太宰堀石坂』（審美社、昭44）
日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書堀辰雄』（有精堂出版、昭46）
小久保実『新版 堀辰雄』（麦書房、昭51）
竹内清己『堀辰雄の文学』（桜楓社、昭52）
小川和佑『評伝 堀辰雄』（六興出版、昭53）
田中清光『堀辰雄 魂の旅』（文京書房、昭53）
大森郁之助『堀辰雄・菜穂子の涯』（風信社、昭54）
池内輝雄編『鑑賞 日本現代文学』第十八卷（角川書店、昭56）
佐々木基一・谷田昌平『堀辰雄 その生涯と文学』
中島昭『堀辰雄覚書——「風立ちぬ」まで』（近代文芸社、昭59）
小久保実編『新潮日本文学アルバム 堀辰雄』（新潮社、昭59）
小久保実編『論集 堀辰雄』（丘書房、昭60）
神西清『堀辰雄文学の魅力』（踏青社、昭61）
三島佑一『堀辰雄の実像』（林道舎、昭62）

- 三島佑一『増補 堀辰雄の実像』(林道舎、平4)
- 竹内清己『堀辰雄と昭和文学』(三弥井書店、平4)
- 中島昭『堀辰雄——昭和十年代の文学』(リーベル出版、平4)
- 松原勉『堀辰雄文芸考』(溪水社、平5)
- 影山恒男『芥川龍之介と堀辰雄——信と認識のはざま』(有精堂出版、平6)
- 谷田昌平『澤東の堀辰雄——その生い立ちを探る』(弥生書房、平9)
- 西原千博『堀辰雄試解』(蒼丘書林、平12)
- 竹内清己『堀辰雄——人と文学』(勉誠出版、平16)
- 竹内清己『村上春樹・横光利一・中野重治と堀辰雄——現代日本文学生成の水脈』(鼎書房、平21)
- 渡部麻実『流動するテキスト——堀辰雄』(翰林書房、平20)
- 宮坂康一『出発期の堀辰雄と海外文学——「ロマン」を書く作家の誕生』(翰林書房、平26)

【雑誌特集】

- 「文芸」(昭28・8)
- 「文学界」(昭28・8)
- 「近代文学」(昭28・9)
- 「文芸」(昭32・2)
- 「解釈と鑑賞」(昭36・3)
- 「国文学」(昭38・7)
- 「現代のエスプリ」(昭41・1)
- 「解釈と鑑賞」(昭49・2)
- 「国文学」(昭52・7)
- 「ユリイカ」(昭53・9)
- 「解釈と鑑賞」(平8・9)
- 「群系」(平15・10)
- 「堀辰雄とモダニズム」(「解釈と鑑賞」別冊、平16・2)
- 「群系」(平16・10)
- 「芸術至上主義文芸」(平23・11)

「文学」(平25・9)

【同時代評・回想】

- 円地文子「堀辰雄氏の「かげろふの日記」」(『南枝の春』万里閣、昭16)
- 大野俊一「神西清と堀辰雄」(『新潮』昭34・2)
- 川端康成、塩田良平宛書簡「所蔵資料紹介」(『日本近代文学館』平4・3・15)
- 「わが現代語訳の意義」(『現代語訳国文学全集』内容見本、非凡閣、昭11)
- 川村湊『物語の娘 宗瑛を探して』(講談社、平17)
- 河上徹太郎「心理主義についての一私見」(『作品』昭7・3)
- 菊池寛「国文学の復興」(『改造』昭8・12)
- 北園克衛「化粧すべき詩人」(『詩と詩論』昭4・6)
- 北原武夫「僕らの文学」(『詩と詩論』昭6・12)
- 小島政二郎『わが古典鑑賞』(中央公論社、昭16)
- 小林秀雄「心理小説」(『文芸春秋』昭6・3)
- 佐佐木信綱『明治大正昭和の人々』(新樹社、昭36)
- 笹沢美明「リルケに就いて——堀辰雄氏に宛てて」(『行動』昭8・12)
- 笹沢美明『リルケの愛と恐怖』(宝文館、昭28)
- 佐藤春夫「月並談義四 文芸時評」(『東京日日新聞』昭11・11・28)
- 佐藤春夫訳『ほるとがる文』(竹村書房、昭9)
- 佐藤正彰「プルーストを訳した頃」(『世界文学全集』第二期第十四卷月報、河出書房、昭31)
- 柴生田稔「古典の現代語訳」(『文学界』昭13・1)
- 清水文雄「「かげろふの日記」について——作者堀辰雄氏へ」(『文芸文化』昭14・8)
- 神西清「プルウステイアナ」(『リベルテ』昭7・11)
- 神西清「編輯後記」(『リベルテ』昭7・11)
- 神西清「四肢の切断」(『リベルテ』昭8・2)
- 杉山平助「文芸時評」(『新潮』昭9・1)
- 中村光夫「むかしの「作品」」(『「作品」復刻版解説・執筆者索引』日本近代文学館、昭56)
- 林光「リルケとの一時期」(『ユリイカ』昭47・10)

- 春山行夫「反対に答ふ」(「詩と詩論」昭4・6)
- 春山行夫「詩と詩論」の時代(『堀辰雄全集』第五卷月報、新潮社、昭30)
- 福田清人「文芸時評」(「行動」昭9・11)
- 福田清人「長谷川さんと第一書房の思い出」(林達夫・福田清人・布川角左衛門編著『第一書房 長谷川巳之吉』日本エディタースクール出版部、昭59)
- 福田晴子「文芸時評」(「婦人文芸」昭9・11)
- 保田與重郎「文芸時評」(「三田文学」昭9・11)
- 福永武彦「追分日記抄」(「新潮」昭28・10)
- 舟橋聖一「文芸時評」(「解釈と鑑賞」昭13・3)
- 舟橋聖一「小説について」(「文学界」昭13・1)
- 丸岡明「弔辞」(「文芸」昭28・8)
- 室生犀星「文芸時評」(「都新聞」昭9・10・3)
- 吉田精一「古典と作家」(「文学界」昭13・3)
- 淀野隆三「その頃の思ひ出」(ブルースト『失われた時を求めて』月報II、新潮社、昭28)
- 南川潤「文芸春秋」から(「三田文学」昭9・11)
- 『物語日本文学』内容見本(至文堂、昭10)

【堀辰雄・研究論文】

- 赤塚正幸『風立ちぬ』(「解釈と観賞」平8・9)
- 赤塚正幸「夢」と「眠り」と「夜」——「眠りながら」と「眠れる人」(池内輝雄編「堀辰雄とモダニズム」、「解釈と鑑賞」別冊、平16・2)
- 安藤宏「エスプリ・ヌーボーと純粋小説」(野山嘉正編『詩う作家たち 詩と小説のあいだ』至文堂、平9)
- 安藤宏「現実への回帰——堀辰雄『風立ちぬ』を中心に」(『自意識の昭和文学』至文堂、平6)
- 飯島洋「聖家族」の心理描写」(「国語国文」平15・1)
- 飯島洋「聖家族」の方法——現実・虚構・幻影」(「京都大学国文学論叢」平15・10)
- 池内輝雄「堀辰雄「ルウベンスの偽画」小論——「詩」と「真実」をめぐる」(「大妻国文」昭47・3)

- 池内輝雄「堀辰雄文学の構造」(「解釈と鑑賞」平8・9)
- 池内輝雄「堀辰雄「ルウベンスの偽画」と「聖家族」」(「東京教育大学文学部紀要・国文学漢文学論叢」昭46・3)
- 池内輝雄「堀辰雄論——「本所」から「幼年時代」まで」(「大妻国文」昭49・3)
- 池内輝雄「堀辰雄「甘栗」考・その他」(「大妻国文」昭50・3)
- 池内輝雄「堀辰雄初期の問題点——「不器用な天使」をめぐる」(吉田精一古稀記念論集刊行会編『日本の近代文学——作家と作品』角川書店、昭53)。
- 石川則夫「現在を喚起する文体——堀辰雄「不器用な天使」論」(「国学院雑誌」平10・10)
- 石田和之「堀辰雄『風立ちぬ』論——予定調和の世界(あるいは責任回避)」(「東洋大学大学院紀要」平12・2)
- 禹朋子「プルーストと堀辰雄——「燃ゆる類」の主題をめぐる」(「帝塚山学院大学研究論集」平16・12)
- 江口清「ラディゲと堀辰雄」(「比較文学」昭33・4)
- 大石紗都子「堀辰雄『曠野』と『古典回帰』」(「国語と国文学」平23・4)。
- 大石紗都子「堀辰雄『風立ちぬ』の文体——不回帰の日々と追憶が出会う場」(「国語と国文学」平25・11)
- 大森郁之助「「物語の女」改訂の意義——「菜穂子」の理解の指標として」(「解釈」昭41・7)
- 岡崎直也「研究動向」(「昭和文学研究」平9・2)
- 岡崎直也「堀辰雄「聖家族」の方法——〈レンブラント光線〉と〈婉曲表現〉」(「日本文学論究」平3・3)
- 小田切進「堀辰雄・三好達治研究」(『現代日本文学大系』第六十四卷月報、昭44・8)
- 菊地弘「堀辰雄の姿勢」(文学批評の会編『転換期の詩人たち』芳賀書店、昭44)
- 木村幸雄「「驢馬」における中野重治と堀辰雄」(「大妻国文」平19・3)
- 熊坂敦子「堀辰雄を研究する人のために」(「国文学」昭38・7)
- 黒岩裕市「堀辰雄『燃ゆる類』の男性同性愛表象——マルセル・プルースト『ソドムとゴモラ』Iとの比較から」(プロジェクトD「日本文学領域」編集『文化表象を読む——ジェンダー研究の現在』お茶の水女子大学21世紀COEプログラムジェンダー研究のフロンティア、平20)

- 神品芳夫「堀辰雄とリルケ」(『堀辰雄全集』別巻二、筑摩書房)
- 小久保実「研究文献展望」(『堀辰雄全集』第十卷、角川書店、昭40)
- 小久保実「堀辰雄「硝子の破れてゐる窓……」」(『国文学』昭42・4)
- 小久保実「堀辰雄研究史」(『解釈と鑑賞』昭36・3)
- 小久保実「堀辰雄」(『近代文学研究必携』学燈社、昭36)
- 小久保実「堀辰雄」(『解釈と鑑賞』昭39・5)
- 小久保実「堀辰雄主要研究文献案内」(『解釈と鑑賞』昭49・2)
- 小島衛「リルケと堀辰雄——《Requiem》(鎮魂歌)をめぐって」(『北海道大学外国語・外国文学研究』昭37・3)
- 小林英夫「堀辰雄の文体」(『解釈と鑑賞』昭36・3)
- 佐藤昭夫「『風立ちぬ』論素描(一)——「フウグ形式」の軌跡」(『実践国文学』昭57・3)
- 佐藤朔「プルーストなど——堀辰雄の西欧的なもの」(『解釈と鑑賞』昭36・3)
- 佐藤泰正「堀辰雄——その「西欧的なるもの」と「日本的なるもの」。「十月」及び「曠野」をめぐって」(『解釈と鑑賞』昭44・7)
- 澁澤龍彦「堀辰雄とコクトー」(『国文学』昭52・7)
- 清水徹「作家論」(『堀辰雄作品集』第二卷、筑摩書房、昭57)
- 神西清「解説」(『堀辰雄集』新潮社、昭25)
- 菅谷規矩雄「堀辰雄」(『迷路のモノログ』白馬書房、昭56)
- 杉野要吉「解説——堀辰雄研究史の展望と研究課題」(『日本文学研究資料叢書 堀辰雄』有精堂、昭46)
- 杉野要吉「昭和十年代の堀辰雄——「沈黙的抵抗」の周辺をめぐって」(『国文学研究』昭39・3)
- 杉野要吉「昭和十年代の堀辰雄——「日本的なるもの」への接近姿勢をめぐって」(『北海道高等学校教育研究会研究紀要』昭40・3)
- 杉野要吉「昭和十年代の堀辰雄——「日本的なるもの」への展開・第二次大和行まで」(『文学・語学』昭40・6)
- 杉野要吉「堀辰雄における日本古典接近の問題——小久保・高田両氏の御論にふれて」(『国語と国文学』昭43・7)
- 杉野要吉「堀辰雄「かげろふの日記」について——歴史小説の挫折」(『国語と国文学』

- 昭45・2)
- 高橋順一「価値の此岸と彼岸——『言語にとって美とはなにか』から」(『季刊 ichiko』平8・4)
- 高橋英夫「二人称の余韻」(『ユリイカ』昭53・9)
- 高橋英夫「青春の翻訳」(『立原道造・堀辰雄翻訳集——林檎みのる頃・窓』岩波文庫、平20)。
- 竹内清己「堀辰雄における西欧文学——プルースト受容」(『文学論藻』平18・2)
- 谷田昌平「堀辰雄「物語の女」の背景——「一九二五年夏」をめぐって」(『四季派学会論集』平5・9)
- 辻研子「堀辰雄『風立ちぬ』——「死のかげの谷」における死者、節子の現前について」(『近代文学論集』平16・11)
- 中島昭「堀辰雄「菜穂子」の成立試論——「物語の女」から「菜穂子」へ」(『横浜国大国語研究』平4・3)
- 中島国彦「古代美への憧れ」とは何か——堀辰雄・奈良大和・『古寺巡礼』(『国学院雑誌』平16・11)
- 中島国彦「『古寺巡礼』と『大和路・信濃路』をつなぐもの——堀辰雄「大和路」ノートの検証を中心に」(『日本近代文学』平17・5)
- 中村真一郎「堀辰雄と共に——一つの感謝の素描」(『人間』昭25・6)
- 中村真一郎「解説」(『かげろふの日記・曠野』創元文庫、昭27)
- 中村真一郎「解説」(『現代日本文学全集』第四十三卷、筑摩書房、昭29)
- 中村真一郎「堀辰雄——その前期の可能性について」(『ユリイカ』昭53・9)
- 中村真一郎「ある文学的系譜——芥川・堀・立原」(『堀辰雄全集』別巻二、筑摩書房)
- 中村三春「意識・無意識・時間——堀辰雄の小説理論」(池内輝雄編「堀辰雄とモダニズム」、「解釈と鑑賞」別冊、平16・2)
- 西川正也「翻訳者・堀口大学の功罪——ジャン・コクトー詩訳・試論」(『比較文学研究』平2・10)。
- 西田敦美「『風立ちぬ』について」(『高知大國文』昭63・12)
- 西村靖敬「堀辰雄の翻訳と創作——ジャン・コクトーとの関係を中心に」(『千葉大学人文研究 人文学部紀要』平16・3)。
- 野口武彦「現代文章講義(七) 死があたかも一つの——堀辰雄『聖家族』」(『日本語学』

- 昭60・3)
- 野沢京子 『風立ちぬ』——あるひとつの生のために——（「立教大学日本文学」平10・1）
- 花田俊典 「不器用な天使」（池内輝雄編「堀辰雄とモダニズム」、『解釈と鑑賞』別冊、平16・2）。
- 原子朗 「文体の問題」（『国文学』昭52・7）。
- 日沼倫太郎 「堀辰雄論——「風立ちぬ」について」（『批評』昭43・1）
- 福永武彦 「堀辰雄と外国文学との多少の関係について」（中村真一郎編著『近代文学鑑賞講座』第十四巻）
- 福永武彦 「解説」（『堀辰雄全集』第四巻月報、新潮社）
- 福永武彦 「『菜穂子』創作ノオト考」（『菜穂子』創作ノオト及び覚書』麦書房、昭53）
- 福永武彦 「編集雑記」（『堀辰雄全集』第五巻月報、筑摩書房）。
- 福永武彦 「堀辰雄の作品」（『福永武彦全集』第十六巻、新潮社、昭62）
- 富士川英郎 「堀辰雄とリルケ」（『堀辰雄全集』第二巻月報、新潮社、昭29）
- 富士川英郎 「リルケ——堀辰雄の西欧的なもの」（『解釈と鑑賞』昭36・3）
- 松田嘉子 「扁理とアンリエット——堀辰雄の初期作品におけるコクトーとラディゲの影響」（『現代文学』昭57・6）
- 松田嘉子 「堀辰雄とフランス文学（前編）——比較文学的アプローチ」（『キリスト教文学』平1・7）
- 丸岡明 「『風立ちぬ・美しい村』について」（『風立ちぬ・美しい村』新潮文庫、昭26）
- 宮内豊 「『風立ちぬ』のしたこと——時間の小説」（『群像』平9・2）
- 森脇善明 「堀辰雄のプルーストとモーリヤックについての覚書」（小久保実編『論集 堀辰雄』風信社、昭60）
- 山崎麻由美 「『物語の女』研究——片山廣子との関わりを中心に」（『日本文学研究』平10・1）
- 山本裕一 「堀辰雄の対他意識の変遷について（一）——『聖家族』を中心に」（『別府大学国語国文学』平・8・12）
- 倉在真 「堀辰雄「聖家族」論——作中のラファエロの絵画をめぐる」（『日本語と日本文学』平15・8）
- 吉田精一 「堀辰雄の文学とその時代」（『国文学』昭38・7）

- 吉田精一「堀辰雄と王朝女流日記」(『現代文学と古典』至文堂、昭36)
- 林淑美「堀辰雄の古代——〈日本主義の文学化〉とは何か」(池内輝雄編「堀辰雄とモダニズム」、『解釈と鑑賞』別冊、平16・2)
- 渡瀬茂「堀辰雄「不器用な天使」の文体における動詞終止形」(『富士フェニックス論叢』平12・3)
- 兪在真「堀辰雄「聖家族」論——作中のラファエロの絵画をめぐる」(『日本語と日本文学』平15・8)
- 渡辺広士「『風立ちぬ』の意味」(『ユリイカ』昭53・9)
- 渡部麻実「堀辰雄『燃ゆる類』論——コクトーからラディゲへ」(『山邊道』平21・11)
- 渡部麻実「研究動向」(『昭和文学研究』平16・3)
- 渡部麻実「科学と天使——堀辰雄とジャン・コクトー」(『日本近代文学』平成22・11)
- 渡部麻実「堀辰雄「風立ちぬ、いざ生きめやも——『風立ちぬ』から『万葉集』へ、『万葉集』から『風立ちぬ』へ」(『国文目白』平25・2)

【その他】

- 芥川龍之介「越びと」(『明星』大14・3)
- 安藤宏「小説の新世代」(『岩波講座 日本文学史』第十三卷、岩波書店、平8)
- 池田亀鑑「王朝時代の女性と文学」(『改造』昭9・1)
- 池田亀鑑「光源氏に於ける母性と女性——源氏物語の恋愛に対する一つの解釈」(『婦女新聞』昭8・11・18)
- 池田亀鑑訳『蜻蛉日記』上(『物語日本文学』第八卷、至文堂、昭10)
- 伊藤整「『スワン家の方』淀野隆三・佐藤正彰共訳」(『新文学研究』昭6・10)
- 今西祐一郎「『蜻蛉日記』序跋考」(『文学』昭62・10)
- 岩本晃代「リルケ関係文献目録(戦前編)」(『昭和詩の抒情——丸山薫・〈四季派〉を中心に』双文社出版、平15)
- 小田桐弘子『横光利一——比較文学的研究』(南窓社、昭55)
- 垣内松三「純粹なる『もの』(自照の文学二)」(『講座』大12・5)
- 柿本奨「蜻蛉日記の敬語」(『学大国文』昭43・12)
- 風巻景次郎「新風断想」(『短歌研究』昭15・11)。

- 片山廣子「日中」(『三田文学』大15・8)
- 木村正中「蜻蛉日記の対兼家表現における敬語否定論」(『玉藻』昭47・3)
- 小林秀雄「人生斫断家アルチュル・ランボオ」(『仏蘭西文学研究』大15・10)
- 島田謹二『日本における外国文学——比較文学研究』上巻(朝日新聞社、昭50)
- 清水文雄『女流日記』(子文書房、昭15)
- 清水文雄「物語の女——「待つ恋」と「眺め」」(『日本古典鑑賞講座』第六巻、角川書店、昭32)
- 鈴木登美「ジャンル・ジェンダー・文学史記述——「女流日記文学」の構築を中心に」(『創造された古典——カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、平11)
- 曾根博義「新心理主義研究序説」(一)～(五) (『評言と構想』昭50・6～56・6)
- 高木和子「平安散文における「人」——非人称の叙述形式」(『日本文芸研究』平13・3)
- 中原中也「後記」(中原中也訳『ランボオ詩集』野田書房、昭12)
- 森岡健二『欧文訓読の研究——欧文脈の形成』(明治書院、平11)
- 柳沢孝子「コントというジャンル」(『私小説の諸相——魔のひそむ場所』双文社出版、平22)
- 横光利一『定本横光利一全集』第一巻(河出書房新社、昭56)
- 横光利一『定本横光利一全集』第二巻、河出書房新社、昭56)
- 与謝野晶子訳『蜻蛉日記』(『現代語訳国文学全集』第九巻、非凡閣、昭13)
- 吉川一義『ブルースト美術館』『失われた時を求めて』の画家たち』筑摩書房、平10)
- 吉川一義『ブルーストと絵画——レンブラント受容からエルスチール創造へ』岩波書店、平20)
- 吉田健一「文学の楽み」(『吉田健一集成』2、新潮社、平5)
- 吉田健一「東西文学論」(『吉田健一集成』1、新潮社、平5)
- 吉田健一「堀辰雄の現代的意味」(『近代文学鑑賞講座』第十四巻、角川書店、昭33)
- 吉田健一「東西文学論」(『吉田健一集成』1、新潮社、平5)
- 吉田精一「芥川龍之介の恋人」(『歴史と人物』昭43・11)
- 渡辺実『平安朝文章史』(東京大学出版会、昭56)
- 渡邊一民『フランスの誘惑——近代日本精神史試論』(岩波書店、平7)
- 『現代日本文学全集』第三十八篇(改造社、昭4)
- 『現代短歌全集』第十九卷(改造社、昭6)

【外国文学】

〈邦訳〉

- アーサー・シモンズ、岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』（新潮社、大2）
- アンドレ・ジッド、新庄嘉章訳『女の学校・ロベール』（春陽堂世界名作文庫、昭8）
- ヴァルター・ベンヤミン、内村博信訳「翻訳者の使命」（浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション2——エッセイの思想』ちくま学芸文庫、平8）。
- エルンスト・ローベルト・クルティウス、大野俊一訳『現代ヨーロッパに於けるフランス精神』（生活社、昭19）
- ギヨーム・アポリネール、堀口大學訳『動物詩集』（大14）
- ギヨーム・アポリネール、堀口大學訳『アポリネール詩抄』（昭2）
- ギヨーム・アポリネール、堀辰雄訳「風景」、「ネクタイ」（「驢馬」大15・4）
- ジャン・コクトー、澁澤龍彦訳『大勝びらき』（白水社、昭29）
- ジャン・コクトー、山川篤訳『グラン・テカール』（近代文庫、昭28）。
- ジュール・ルナール、堀辰雄訳「雪」（「辻馬車」大15・7）
- フランシス・カルコ、井上勇訳『巴里芸術家放浪記』（講談社文芸文庫、平11）
- マルセル・プルースト『スワンの恋』（作品社、昭8）
- マルセル・プルースト『土地の名』（作品社、昭9）
- マルセル・プルースト、井上究一郎訳『心の間歇』（弘文堂書房、昭15）
- マルセル・プルースト、『失われた時を求めて』（新潮社、昭28〜30）
- ミドルトン・マリイ、神西清訳「プルウストと近代意識」（「詩と詩論」昭6・9）
- レイモン・ラディゲ、江口清訳『ドルジェル伯爵の舞踏会』旺文社文庫、昭49）
- レイモン・ラディゲ、堀口大學訳『ドルジェル伯の舞踏会』（白水社、昭6）
- レイモン・ラディゲ、生島遼一訳『ドルジェル伯の舞踏会』（新潮文庫、昭28）
- レイモン・ラディゲ『ラディゲ全集』
- ロマン・ヤークブソン、川本茂雄監修・田村すゞ子・村崎恭子・長嶋善郎・八幡屋直子訳『一般言語学』（みすず書房、昭48）。

〈欧語文献〉

André Salmon, *Le Manuscrit trouvé dans un chapeau*, Paris, Stock, 1924.

- Arthur Symons, *The Symbolist Movement in Literature*, London, William Heinemann, 1899.
- Bernard Fay, « Marcel Proust, inventeur de plaisirs », *Panorama de la littérature contemporaine*, Paris, Kra, 1925.
- Guillaume Apollinaire, « Le Matelot d'Amsterdam », *L'Héréditaire&Cie*, Paris, Stock, 1910.
- Guillaume Apollinaire, *Alcools*, Paris, N.R.F., 1920.
- Henri Massis, *Raymond Radiguet*, Paris, Cahiers, 1927.
- Jacques Rivière, « Marcel Proust », *La Nouvelle Revue Française*, avril 1925.
- Jean Cocteau, *Le Grand Écart*, Paris, Stock, 1924.
- Jean Cocteau, « La voix de Marcel Proust », *La Nouvelle Revue Française*, janvier 1923.
- Kyūichiro Inoue, « Proust et Chardin », *Etude de Langue et Littérature Française*, Tokyo, 1962.
- Lawrence Venuti, *The translator's invisibility*, London, New York, Routledge, 1995.
- Leo Spitzer, "Zum Stil Marcel Prousts", *Stilstudien 2*, München, Max Hueber Verlag, 1961.
- Malcolm Cowley, "A Monument to Proust", *Dial*, March 1923.
- Marcel Proust, *Du côté de chez Swann I*, Paris, Gallimard, 1926.
- Marcel Proust, « Les regrets, rêveries couleur du temps V, X IV, X X IV », *Les plaisirs et les jours*, Paris, Gallimard, 1924.
- Rainer Maria Rilke, *Requiem : Für eine Freundin*, Insel-Verlag, Leipzig, 1909.
- Rainer Maria Rilke, *Requiem and other poems*, translated by J.B. Leishman, Hogarth Press, London, 1935.
- Raymond Radiguet, *Les Jones en feu*, Paris, Grasset, 1925.
- Raymond Radiguet, *Le Bal du Comte d'Orgel*, Paris, Grasset, 1924.

(5) 論文の内容の要旨

本研究は、堀辰雄の翻訳行為と創作行為の連関に視座を置き、昭和前期の文学における堀辰雄の達成を、その文体生成の過程の分析を通して明らかにする試みである。

昭和初年代から十年代に活躍した作家堀辰雄は、生涯にわたり翻訳と創作を同時並行で進め、その中で創作の方向性を徐々に変えた。従来、翻訳行為は創作行為より二義的なものと見なされてきたが、堀は単に自立した翻訳を發表しただけでなく、エッセイや小説内で部分訳を行い、あるいは小説の中に引用と断らないで外国文学の一節を逐語的に日本語

に置換して取り入れ、これらの行為を通して異言語の語彙・語法・構文上の異質性を取り入れた文体を創り出した。堀の文体が前世代の新感覚派と異なり、異言語に自らが触れそこから作りだした文体であることを踏まえ、堀の文体が大正期から何を引き継ぎ、戦後文学に向けて何を橋渡しするものだったかを解明する。また分析のための基礎作業として、神奈川近代文学館蔵堀辰雄旧蔵洋書の堀自筆書き込みの実態を調査報告した。

第一部「翻訳から小説へ」では、堀の翻訳行為と創作行為との最初の結節点を翻訳・詩・コント・エッセイ、文壇処女作「不器用な天使」の分析を通して捉えた。

第一章「詩的モダニズム——翻訳・詩・コント・エッセイ」では、堀辰雄初期の翻訳・詩・コント・エッセイを横断的に論じた。堀はフランスの新詩精神運動の詩人達に関するエッセイを書いたが、堀はそこにフランス語の詩やエッセイをそれと断らず翻訳・引用してちりばめており、それらのエッセイの中で彼らの詩の幻想性に注目している。この時期の堀の詩に目を向けると、堀は主体の内的世界を形象化した幻想を、詩行における主述の逆転を通して作り出したことが見える。さらに堀がこうした詩における試みを、同時期のコントにも応用していることを指摘し、翻訳・詩・コント・エッセイを通して堀が詩・コントの文体を作り出し、詩的幻想を生み出す過程を明らかにした。

第二章「不器用な天使」論——翻訳から小説へ」では、堀辰雄の文壇処女作「不器用な天使」をコクトー翻訳に視点を置いて論じた。堀はコクトー『グラン・テカール』の部分訳を通して、訳文において抽象概念を動作主体化する文体を作り出した。さらに堀は「不器用な天使」の中で『グラン・テカール』の一節を翻訳・引用し、単語の概念化・複数化・主述の逆転・文同士の緊密な連結を通して人物の心理や行為が動かされる文体を作り出した。堀が翻訳を通じて自身の小説の言葉と、言葉によって構築される世界との関係性を問い直していることを論じた。

第二部「モダニズム文学の翻訳」では、「不器用な天使」において試みた作品内翻訳という方法が、モダニズム文学の翻訳という形で引き継がれていく過程を追究した。

第三章「『聖家族』論——ラディゲの翻訳」では、堀がラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』のフランス語の翻訳を通して、新たな文体を作り出す過程を分析する。堀はラディゲに関する概説的なエッセイを、『ドルジェル伯の舞踏会』原文を翻訳・集成する形で書いていることを指摘した。さらに堀が『ドルジェル伯の舞踏会』を翻訳・引用する形で「聖家族」の中に取り入れ、指示語による前述の要素の連続的な継承・理由提示の副詞句・無生物主語構文の組み合わせにより、言葉の上で因果が連鎖する文体を作り出した。この文

体によって、堀が生涯にわたりこだわり続けた、母娘と青年と作家の恋愛関係が作り出される過程を分析した。

第四章「プルーストの翻訳——『美しい村』へ」では、プルースト作品の翻訳と堀の創作との関連を論じる。堀辰雄は、文壇における方法論議と距離を置きつつ、エッセイの中で『失われた時を求めて』を部分訳・引用することで同作の文体を学びとろうとする様が窺える。堀が、名詞に後置された形容詞句が並列される文体に注目してこれをなぞるように日本語化し、同時期の創作の中に取り入れていく過程を明らかにした。

第三部「古典の翻訳」では堀の「古典回帰」時代として一般にとらえられる昭和十年前後の作品を古典の翻訳という視点から論じた。

第五章「物語の女」論——昼顔はどこに咲いているか——では、従来「菜穂子」のプレテクストとして自立した作品として扱われてこなかった「物語の女」を、王朝女流日記への注目という時代的文脈の中に置き、独立した作品として読み直した。堀が王朝女流日記における物語の女という形象を受けとり、女性一人称による回想の形式を作り出す試みとして同作を捉えた。さらに、母娘・青年・作家の恋という「聖家族」以来のモチーフが引き継がれた本作で、堀がモデル人物の芥川龍之介・片山廣子の歌を引用していることに注目し、そうした手法に注目した時に見えてくる物語を読み解いた。

第六章「かげろふの日記」論——古典の翻訳——では、古典の翻訳という方法に視点を置いて、堀の王朝小説「かげろふの日記」を読み解いた。堀辰雄が『蜻蛉日記』上中巻の記事を構成する文を、一語一語なぞるように現代語に置換して「かげろふの日記」の文を作り出す方法を、一種の翻訳行為として捉えた。特に人称詞の変換過程に注目すると、堀が「私」、「自分」という自称詞、「あの子」、「あの方」という他称詞を原文に付加・原文の単語を変換する形で「かげろふの日記」の文を作り出す様が見えてくる。こうした文の生成によって、中年の一女性が過去に起こった男性との関係を回想して書き記す文体を、堀が王朝女流日記の翻訳を通じて獲得したことを論じた。

第四部「『風立ちぬ』論」では、ここまでの堀の翻訳から小説への展開を踏まえ、堀辰雄生涯の代表作『風立ちぬ』を論じた。第七章では作品全体の構造の分析をし、第八章では作中におけるリルケ作品の翻訳に注目する形で最終章「死のかげの谷」を論じた。

第七章「『風立ちぬ』論——小説の時間」では、『風立ちぬ』を「序曲」と「冬」という二章の関係性に視点を置いて読み解いた。従来、『風立ちぬ』は連続する五章仕立ての小説だと自明視されてきたが、そのように読むと同作の特異な時間構造を見落とす。『風

立ちぬ』前半三章における時間性と後半二章における時間性の差異を分析し、こうした時間性の差異が、作中作という構造によってもたらされていることを指摘した。前半三章が「私」によって書かれた時間、後半二章が「私」が書く時間という構造的な断層が作り出されることで、婚約者の死を書くことで生きる小説家というアンビヴァレンスが作中で内在的に解決されていることを指摘した。

第八章『風立ちぬ』論——「死のかげの谷」におけるリルケ翻訳」では、『風立ちぬ』最終章の「死のかげの谷」に視点を置いて同作を読み解いた。「死のかげの谷」に引用されるリルケ「鎮魂歌」を堀が何度か翻訳していることに注目し、訳文の分析を行った。『風立ちぬ』では、リルケ「鎮魂歌」が「私」から節子に呼びかける時の口調と合致するように訳されていることを指摘した。そのような「鎮魂歌」が「死のかげの谷」に引用されていることの意味を論じた。

「補論 堀辰雄旧蔵洋書の調査」の第九章「アポリネール関連書物」、第十章「ラディゲ関連書物」、第十一章「コクトー関連書物」では、神奈川近代文学館蔵堀辰雄旧蔵洋書の書き込み調査を報告した。アポリネール関連八冊、ラディゲ関連五冊、コクトー関連二十三冊の計三十五冊の書き込みの有無を調査した。堀辰雄が自身の小説に取り入れた箇所を下線を引いていること、訳出した詩の本文に折り込みや印、同じく巻末目次に印があること等を明らかにし、書き込みの時期が不明だった堀の旧蔵洋書が堀初期に読まれたものである可能性を指摘した。また、堀がこれらの洋書の読書に用いたフランス語の辞書の推定、単語の訳を書き込むなど書き込みのあり方の分類、添付された書店票等の補足的な情報を報告した。

以上、全四部、本論八章と補論三章を通して、堀辰雄の翻訳から創作への軌跡をたどった。本研究は、堀辰雄の翻訳行為と創作行為の連関に視座を置いてその営為を創作史に沿って分析し、堀が異言語を通じた文体生成によって、昭和前期のモダニズム文学において占めた位置と達成を明らかにした。